九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日野啓三著作年譜

石田, 忠彦
鹿児島大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/27418

出版情報：九大日文. 20, pp.72-97, 2012-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

日野啓三著作年譜

石田 忠彦（ISHIDA Tadahiko）

はじめに

日野啓三は、戦後、おもに「近代文学」によって批評活動を始め、その後小説の創作へと活動の幅を広げ、やがて、対談、講演、ルポルタージュ、旅行記などと多彩な文学活動をなした作家である。また、後記した「略歴」でも知られるように、芥川賞を初めとする主要文学賞の多くの受賞歴もある。にもかかわらず、それでは幅広い読者層を獲得していたかというと、必ずしもそうではなく、日野自身も石田宛ての私信では、その不遇意識を訴えていた。

しかし、日野の文学的業績は、現在の社会問題や文化的課題に対して示唆的な要素を多く含んでいる。それは、家族の変容ないしは新しい家族像の問題であり、宇宙的意識とでもいうべき現代人の意識の拡大の問題であり、豊富な海外体験に基づいた東アジアから中近東までの諸国との文化的な距離の問題などである。その意味でも、日野は再評価されるべき作家である。

作家が再評価されるためには、その作家の全容が明らかにならなければならない。本著作年譜はそのような目的で作成されたものである。

本著作年譜は、「国語国文薩摩路」（鹿児島大学国語国文学会・平成四年三月）に既に発表した、一九九二年までのものをその後の調査によって改稿し、さらに、それ以後の二〇〇三年までのものを付加したものである。その際、「magazine plus（Nichigai web service）」の情報の一部を引用した。結果として、日野啓三の全著作活動の年譜にほぼ近づいたものである。

ただ、初出紙誌および初出年月日その他に、いまだに未調査のものが残り、今後に課題を残している。

また、平成四年三月作成の後、山内祥史氏の「〈郷土作家資料紹介〉日野啓三創作総覧稿」（広島大学近代文学研究会「近代文学試論」第六号・二〇〇八年一二月）における、詳細な掲載誌の書誌研究があるが、この業績を反映させていない。これも今後の課題である。

あるいは、未完成のものの公表に対する誘りも免れまいが、それは甘受するとして、これからの後進による補正を待つ次第である。

蛇足を加えれば、日野啓三は単行本に収めるにあたって、頻繁に作品名の改題や本文の改変を行った作家である。そのことは、作家活動の関心の所在とその変化とを知るうえで軽視できない傾向であるので、年譜の作成にあたっては、この点にとくに留意した。

日野啓三略歴

一九二九（昭四）年六月一四日東京生まれ。一九三四年、父母と朝鮮に渡り、慶尚北道大邱に住む。一九四五年、父の郷里の広島県に引き上げる。一九四六年、第一高等学校文科甲類入学。一九四九年、東京大学文学部社会学科に進学。一九五〇年、同人誌に文芸評論を書き始める。一九五二年、読売新聞社入社、外報部勤務。一九六〇年、韓国常駐特派員。一九六四年、南ベトナム常駐特派員。一九六六年、小説「向う側」を書く。一九六七年、再びベトナムへ。一九七四年、「此岸の家」で第二回平林たい子文学賞受賞。一九七五年、「あの夕陽」で第七二回芥川賞受賞。「読売新聞」編集委員となる。一九八二年、『抱擁』で第一〇回泉鏡花賞受賞。一九八四年、読売新聞社退社、嘱託編集委員となる。一九八六年、『夢の島』で第三六回芸術選奨文部大臣賞受賞。同年、『砂丘が動くように』で第二二回谷崎潤一郎賞受賞。一九八七年、芥川賞選考委員となる。一九九二年、『断崖の年』で第三回伊藤整文学賞受賞。一九九三年、癌で入院。『台風の眼』で第四六回野間文芸賞受賞。一九九五年『光』で第四七回読売文学賞受賞。二〇〇〇年、芸術院賞受賞・日本芸術院会員となる。二〇〇二（平成一三）年一〇月一四日大腸癌で死亡。

凡例

① 各項目は、作品名・（「発表紙誌」または『単行本名』・出版社）・発表年月日・改題のある場合は改題名、の順の記載である。

② 項目の末尾に#印のあるものは、「magazine plus」からの引用である。

③ 単行本はゴチック体で示し、所収作品名を列記した。その際、単行本所収に際して、改題されたものはその都度改題名を示した。

④ 発表紙誌および発表年月日の箇所に、？印のあるものは、未調査のものである。

日野啓三著作年譜

＊一九五〇年（昭和二五）

・若き日のドストエフスキー（「二十代」）創刊号

＊一九五一年（昭和二六）

・イリヤ・エレンブルグ論―ひとつの伝説について（「近代文学」）六月

・野間宏論―戦後作家論（「近代文学」）八月

・堀田善衛論―颱風の眼ということ（「近代文学」）一二月

・現代文学とは何か（「現代文学」）2号

＊一九五二年（昭和二七）

・ジャン・ゲノー著　内山敏訳編『深夜の日記』（「近代文学」）二月

・李広田作　岡崎俊夫訳『引力』（「近代文学」）七月
・除村吉太郎編『ソヴェト文学史』ⅠⅡ（「近代文学」）九月
・虚点という地点について―荒正人論（「文学界」）一二月

＊一九五四年（昭和二九）

・レオニード・レオーノフ　袋一平訳『襲来』（「近代文学」）二月
・大審問官論（「近代文学」）三月
・伊藤整著『火の鳥』（「近代文学」）三月
・アルベール・カミュと正義―『正義の人々』について（「三田文学」）五月
・後進国における現代の課題―マニフェストにかえて（「現代評論」）六月
・現代の神話（「現代評論」）六月　＊のち「埴谷雄高『死霊』論」に改題（『虚点の思想』）
・起伏ある潮流　奥野健男と（「新日本文学」）一一月

＊一九五五年（昭和三〇）

・座談会　戦後における批評の問題（「近代文学」）一月
・エレンブルグ『嵐』論―沈黙の重さについて（「近代文学」）二月　＊のち「流血と沈黙」に改題（『虚点の思想』）
・現代史講座別巻『戦後日本の動向』（「近代文学」）三月
・颱風の眼　焼跡について（「近代文学」）六月　＊のち「焼跡について」（『存在の芸術』）、「焼跡から」（『孤独の密度』）に、それぞれ改題
・颱風の眼　転向と新しい精神（「近代文学」）七月　＊のち「革命と転向」に改題（『虚点の思想』）
・堀田善衛『時間』・『夜の森』（「三田文学」）七月
・颱風の眼　夜明け前の対話（「近代文学」）八月
・颱風の眼　思考形成の変革（「近代文学」）九月
・座談会　「静かなドン」をめぐって（「近代文学」）一〇月
・颱風の眼　戦後（「近代文学」）一〇月
・三島由紀夫論（『昭和の作家たち』Ⅲ・中島健蔵他編「現代作家論叢書」・英宝社）一一月　＊のち「非在からの復権」に改題（『幻視の文学』）、さらに「存在のニヒリズム」に改題（『名づけられぬものの岸辺にて』）
・不毛からの創造（「近代文学」）一二月
・颱風の眼　セザンヌの遺作（「近代文学」）一二月
・トーマス・マン『ファウスト博士』論（「近代文学」）一〇月
・政治と文学―メイラー「大統領の白書」？

＊一九五六年（昭和三一）

・アンドレ・マルロオ「希望」論（上・下）（「三田文学」）四月・五月　＊のち「歴史と永遠」に改題（『虚点の思想』）、さらに「無人境の美学」に改題（『幻視の文学』）
・ドストイェフスキーを語る―『罪と罰』をめぐって（「近代文学」）一二月

＊一九五七年（昭和三二）

・文芸時評（「近代文学」）一月～七月

・座談会　ドストイエフスキーを語る―悪霊をめぐって（「近代文学」）一月

・座談会　ドストイエフスキーを語る―カラマゾフの兄弟（「近代文学」）五月

・存在の密度―『野火』の魅力について（「近代文学」）一〇月　＊のち「大岡昇平『野火』論」に改題（『孤独の密度』）

・物とリルケ（「ユリイカ」）一二月　＊のち「転向についてR・M・リルケ論」に改題（『幻視の文学』）

＊一九五八年（昭和三三）

・『森と湖のまつり』について（「近代文学」）九月

・S・カブリックの眼―「突撃」と「現金に体を張れ」（「映画評論」）一月

・フレッド・ジンネマンとアレキサンダー・マッケンドリック―中堅作家論（「映画評論」）五月

・現代戦争と映画―「裸者と死者」について（「映画評論」）一一月

＊一九五九年（昭和三四）

・批評の誕生（「近代文学」）一月

・猪野謙二著『日本文学の近代と現代』（「新日本文学」）三月

・小説の思想と表現―ドストエフスキー『白痴』について（「近代文学」）四月

・原作と映画―二つの「氾濫」（「映画評論」）六月

・「灰とダイアモンド」論（「映画評論」）七月　＊のち「戦争と平和　ワイダ「灰とダイアモンド」」に改題（『虚点の思想』）

・座談会　戦後文学の批評と確認　荒正人（上・下）（「近代文学」）七・八月

・即物論（「現代叢書」）第三輯　＊のち「即物的ということ」に改題（『孤独の密度』）

・廃墟論（「現代叢書」）第四輯

・戦争と平和―大江健三郎と反現実（「日本読書新聞」）？　＊のち「大江健三郎と反現実」に改題（『幻視の文学』）

・即物的表現論―存在のリアリズム（「現代叢書」）？　＊のち「存在論的表現論」に改題（『存在の芸術』）

・セザンヌと反人間的？

＊一九六〇年（昭和三五）

・不吉なリズム―一九五九年における大江健三郎および石原慎太郎の仕事と現代のヴィジョン（「近代文学」）一月＃

・戦後文学の批判と確認　埴谷雄高（上・下）（「近代文学」）五・六月

・第三の道（「現代叢書」）第五輯　＊のち「天籟について」に改題（『孤独の密度』）

・荒正人論（「解説」『新選現代日本文学全集』筑摩書房）

・倉橋由美子と抽象小説（「図書新聞」）？

・福永武彦と古い夢・新しい方法（「図書新聞」）？

＊一九六一年（昭和三六）

・ソウル交友記（「近代文学」）七月

・ＳＦの黙示録（「日本読書新聞」）？

・アンドレ・マルローと永遠？

＊一九六二年（昭和三七）

・溶けろ、ソウル（「文芸」）六月

・ジョン・ケージと不確定性　？六月

＊一九六三年（昭和三八）

・ヘンリー・ミラーと熱い抽象？

＊一九六四年（昭和三九）

・座談会　『近代文学』の功罪（「近代文学」）八月

・光あれ（この年に執筆、未発表）　＊のち「終末に光あれ」に改題（『虚点の思想』）

・開高健と言葉への復讐（図書新聞）？

・状況と地平（前半部分）？

・ドストエフスキーと向う側？

＊一九六五年（昭和四〇）

・**『ベトナム報道　特派員の証言』**（現代ジャーナリズム出版会）一一月（開高健の序文「痛覚からの出発」を付す）

＊一九六六年（昭和四一）

・広場（「南北」）七月

・炎（「三田文学」）一一月

・座談会　“文学”は解体する―66年の文学と状況（「文芸」）一二月

・ゲリラ的人間論（「週刊読書人」）？

・政治と人間（「週刊読書人」）？

・ノーマン・メイラー“それ”（「週刊読書人」）？

・状況と地平（後半部分）？

・大江健三郎と無？

・悪夢の彼方―ベトナムの夜の底で（中央公論からの依頼で執筆、ボツになる）

＊一九六七年（昭和四二）

・兵器に至る知性―ベトナム裁判の証拠品を見て（「文芸」）三月　＊のち「殺人兵器と知性」に改題（『虚点の思想』）

・私はベトナムを見たか（未発表）　＊のち「悪夢の彼方」として『虚点の思想』と『名付けられぬものの岸辺にて』に所収

・座談会　現代文学における私と虚構（「文芸」）五月

・**『存在の芸術―廃墟を越えるもの』**（南北社）一一月　「焼跡について」「廃墟論」「即物論」「存在論的表現論」「様式的変

貌（現代小説論）」「存在芸術への道（アンドレ・マルロオと永遠・セザンヌと反人間的・アラン・レネと不条理・ジョン・ケージと不確定性・ドストエフスキーと向う側・大江健三郎と無・ヘンリー・ミラーと熱い抽象・ブルーノ・シュルツと黒い虚構）」「状況と地平（終末の端緒・反本格小説・小説と怪物・虚点からの変貌・精神の離陸・亡霊について・祭政一致的文学・無機的時代・読者も変わらねばならぬ・非小説への可能性・荒野からのメッセージ・言葉とアンガージュマン）「現代に詩的なるもの」「あとがき」「作品執筆年度」

・彼方からの声（『戦後文学』真光社）　＊のち「梅崎春生『幻化』論」に改題（『幻視の文学』）？

・謎の沼のなかで？　＊のち『存在の芸術』と『名付けられぬものの岸辺にて』に所収

・現代文学はどうなるか（「週刊読書人」）？

・現代に詩的なるもの？

・ブルーノ・シュルツと黒い虚構？

＊一九六八年（昭和四三）

・詩の本　ⅠⅡ（「現代詩手帳」）二月

・私と現代詩（「現代詩手帳」）三月

・廃墟に託した心の荒野―井上光晴「階級」（「朝日ジャーナル」）三月一七日　＊のち「井上光晴と内なる荒廃」に改題（『幻視の文学』）

・ニャット・ハン**『火の海の中の蓮華―ベトナムは告発する―』**（日野啓三訳・読売新聞社）五月「訳者まえがき」「序章　火の海の中の蓮華」「第1章　戦争と平和」「第2章　歴史的背景」「第3章　世界の良心に訴える」「補足・南ベトナムの仏教徒について　日野啓三」

・詩的言語（「現代詩手帳」）八月

・物と空間（「文学界」）九月　＊のち「物と空虚」に改題（『幻視の文学』）、「空虚について」に再改題（『名付けられぬものの岸辺にて』）

・「カラマゾフの兄弟」論（「解説」『カラー版世界文学全集』河出書房）九月

・読書遍歴（「週刊読書人」）一一月一八日　＊のち「思考と幻想」に改題（『幻視の文学』）

・逸脱の時空間―「夜のダイヤモンド」（「文芸」）一一月

・ゲリラ的戦いを！（「現代詩手帳」）一一月

・地下へ（「文芸」）一二月

・**『幻視の文学　現実を越えるもの』**（三一書房）一二月　「宿命の逆用（不毛からの創造・トーマス・マン『ファウスト博士』論・無人境の美学―アンドレ・マルロオ論・転向について―R・M・リルケ論・非在からの復権―三島由紀夫論）」「逸脱への意志」「反現実の道（大江健三郎と反現実・倉橋由美子と抽象小説・福永武彦と古い夢・新しい方法・開高健と言葉への復讐・井上光晴と内なる荒廃・ノーマン・メイラーと“それ”・現代文学はどうなるか）」「幻視の視点（事実と虚構・現実と妄想・思考と幻想・夢と狂気・物と空虚・逸

脱の時空間)」・「根源的ヴィジョン（大岡昇平『野火』論―孤独の密度・梅崎春生『幻化』論―薄明のヴィジョン・谷崎潤一郎『夢の浮橋』論―根源的なるもの・ドストエフスキー『白痴』論―永遠の構図)」「あとがき」

・**『虚点の思想　動乱を越えるもの』**（永田書店）一二月　「夜明け前の対話」「魂の中の動乱（溶けろ、ソウル・終末に光あれ)」「悪夢の彼方―サイゴンの夜のそこで」「虚点の黙示録（荒正人論―虚点という地点・埴谷雄高「死霊」論―呪われたものⅠ・大審問官論―呪われたものⅡ・「カラマーゾフの兄弟」論―予言の書・現代文明と抵抗)」・「矛盾の構図（歴史と永遠―マルロー「希望」・流血と沈黙―エレンブルグ「嵐」・革命と転向―ケストラー「真昼の暗黒」・戦争と平和―ワイダ「灰とダイヤモンド」・政治と文学―メイラー「大統領への白書」)」「解説的あとがき」

・事実と虚構（「国語通信」）？

・現実と妄想（「週刊文春」）？

・夢と狂気（「現代詩手帳」）？

・夢のフロンティア（「文芸」）？　＊のち前半を『幻視の文学』に、後半を『虚構的時代の虚構』に収録

・『夢の浮橋』論（未発表）　＊のち『幻視の文学現実を越えるもの』、『谷崎潤一郎研究』（荒正人編著・昭和四七年・八木書店）に収録

＊一九六九年（昭和四四）

・破壊への怖れと魅惑―開高健『七つの短い小説』について（「文学界」）七月＃

・デルタにて（「文芸」）八月

・“まじめ”と“遊び”―松原新一「文学的勇気」（「文芸」）九月

・小林秀雄のドストエフスキー（「国文学」）一一月

・人間存在への意識―基本的な逸脱（「国文学」）二月

・物語るという戦い？　＊のち『虚構的時代の虚構』、『名付けられぬものの岸辺にて』及び『虚構的時代の虚構』に収録

＊一九七〇年（昭和四五）

・小説の小説について―井上光晴論（「文学」一月　＊のち「遥かなる帰還」（『虚構的時代の虚構』)、「井上光晴『海へ行く道』論」（『孤独の密度』）に改題

・ソンミ村、事実から事件へ―われわれは“事件”をつくらねばならぬ（「展望」）二月　＊のち「虚構する意志」（『虚構的時代の虚構』）に改題

・“自由”であること―「イージー・ライダー」（「文芸」）四月

・ニュー・ラディカルの体験―スーザン・ソンタグ「ハノイで考えたこと」について（新書解題）（「文学界」）四月＃

・還れぬ旅（「文芸」）七月

・めぐらざる夏（「文学界」）一〇月

・垂直の精神（「解説」『石上玄一郎作品集』冬樹社）一〇月

・音楽以上のもの―「ウッドストック」（「文芸」）一〇月
・悠々たる文体の成功―李恢成『われら青春の途上にて』（「早稲田文学」）一一月
・文学をこう考える（「東京新聞」）？夕刊一二日　＊のち「はじめに夢があった」（『虚構的時代の虚構』）、「夢と文学」（『孤独の密度』）に改題
・黒い童話の世界―埴谷雄高「姿なき司祭」（「文芸」）一二月

＊一九七一年（昭和四六）

・喪われた道（「文芸」）五月
・虚構的時代の虚構（「週刊読書人」）六月？
・垂直の旅―グイード・ピオヴェーネ著・千種堅訳『冷たい星』（「文芸」）八月
・私の中の昭和史（「文芸春秋」）九月　臨時増刊号
・文化学院・講演「ドストエフスキー誕生150年記念」九月　＊のち「小説家ドストエフスキーの誕生」（『虚構的時代の虚構』）、「ドストエフスキー『地下生活者の手記』『罪と罰』論」（『孤独の密度』）に改題
・未来に投影される夢―「小さな巨人」（「文芸」）一〇月
・**『還れぬ旅』**（河出書房新社）一〇月　「還れぬ旅」「めぐらざる夏」「喪われた道」
・一冊の書物（『埴谷雄高作品集　8』河出書房新社）

＊一九七二年（昭和四七）

・座談　漂流そしてわれらのうちなる日本人（「週刊読書人」）一月三日
・文学的前衛としての埴谷雄高―存在のための戦い（「国文学」）一月
・原初に自発するもの―『闇のなかの黒い馬』論（「文芸」）三月　＊のち「原初に自発するもの」（『埴谷雄高作品集　別巻』）、「虚空の凝集力」（『虚構的時代の虚構』）、「永劫に自発するもの」（『名付けられぬものの岸辺にて』）にそれぞれ改題
・原形質的な密度―島尾敏雄「硝子障子のシルエット」（「文芸」）五月
・出会い　夢の中での出会い（「海」）五月
・無人地帯（「文学界」）五月
・安部公房の矛盾―『砂の女』と『燃えつきた地図』の間（「国文学」）九月　臨時増刊号　＊のち「超越の条件」（『虚構的時代の虚構』）に改題
・**『虚構的時代の虚構』**（冬樹社）九月「手ごたえなき時代（虚構的時代の虚構・象徴的時代）」「虚構の原点(私を超える私・はじめに夢があった・虚空の凝集力　埴谷雄高論・夢の中での出会い)」「言葉による超越（物語るという戦い・増殖する言葉・超越の条件　安部公房・垂直の精神　石上玄一郎論・遙かなる帰還　井上光晴論・新しい空間）」「創造られる地平（日常の裂け目・魂のフロンティア・虚構する意志）」「小説家ドストエフスキーの誕生―『地下生活者の手記』から『罪

と罰』へ」「あとがき」
・ローマに透写された私の歴史―「フェリーニのローマ」（「文芸」）一一月＃

＊一九七三年（昭和四八）

・守宮的なもの（「世界」）一月　＊のち「ヤモリ的な」（『私のなかの他人』）に改題
・遺しえぬ言（「季刊芸術」）春　25号
・黙示のなかのベトナム―私自身にとってのベトナムは何だったか（ベトナム戦争は終わったのか・特集）（「世界」）四月＃
・特集・変革の渦中を生き抜く志士十人本多勝一―取材される側に立つ報道者（「世界」）五月＃
・此岸の家（「文芸」）八月
・父の朗読（「新潮」）一〇月　＊のち「物語としての人生」（『聖なる彼方へ』）に改題
・島尾敏雄における夢と現実―近作「引越し」について（「国文学」）一〇月　＊のち「日常の光―島尾敏雄「引越し」」（『私のなかの他人』）、「島尾敏雄『引越し』論」（『孤独の密度』）に改題
・発想の姿勢（「文学界」）一二月　＊のち「地下鉄の隅で」（『私のなかの他人』）に改題
・対岸（「審美」）一一月終刊号

＊一九七四年（昭和四九）

・餡入りドーナツの啓示（「東京新聞」）一月二二日夕刊　＊のち「ドーナツの啓示」（『私のなかの他人』）に改題
・対談　四十代文学のリアリティ（「流動」）二月
・雲の橋（「文芸」）二月
・作中人物　剥き出しの生（「海」）三月
・浮ぶ部屋（「文芸」）六月
・母なるもの（五木寛之作品集第二十三巻『地図のない旅』「解説」）六月
・歴史と風土（「共同通信」）七月　＊のち「創るべき日常」（『私のなかの他人』）改題
・対談　朝鮮育ち―二足草鞋（「季刊芸術」）七月
・第二回平林たい子文学賞「受賞のことば」（「新潮」）七月
・変身願望の落し穴（「中央公論」）七月　＊のち「半人間の悲しみ」（『私のなかの他人』）に改題
・韓国遠望（「東京新聞」）七月二二日夕刊　＊のち改題「遠い憂愁」（『私のなかの他人』）
・**『此岸の家』**（河出書房新社）八月　「遺しえぬ言」「此岸の家」「雲の橋」「浮ぶ部屋」
・対談　戦後から現在へ・秋山駿と（「文芸」）九月
・あの夕陽（「新潮」）九月
・校旗を焼いた日（「群像」）九月
・私の原風景　街灯がひとりでに消えるとき（「すばる」）九月
・現実という彼岸（「解説」安岡章太郎『舌出し天使』中公文庫）九月

・優しいおとなの眼（「中央公論」）九月　＊のち「優しさについて―古山高麗雄『蟻の自由』」（『私のなかの他人』）に改題
・浮ぶ部屋（「文芸春秋」）九月＃
・対談　朝鮮人と日本人（「諸君」）一一月
・韓国文学との対話（冬樹社『現代韓国文学選集』第四巻「月報」）一二月　＊のち「韓国文学遠望」（『私のなかの他人』）に改題
・遠い陸橋（「海」）八月
・日録（「日本読書新聞」）？　＊のち「四十九年秋」（『私のなかの他人』）に改題

＊一九七五年（昭和五〇）

・わが家の雑煮　おふくろから女房へ（「週刊小説」）一月三日
・天堂への馬車代（「中央公論」）一月
・“私のなかの他人”に出会う道（「読売新聞」）一月二三日夕刊　＊のち改題「私のなかの他人」（『私のなかの他人』）
・父・私・子供（「読売新聞」）二月一六日　＊のち改題「父と子」（『私のなかの他人』）
・石の年（「文学界」）三月
・世界を支援せよ（「解説」吉行淳之介『花束』中公文庫）三月
・風の地平（「文芸」）三月
・あの夕陽（「文芸春秋」）三月
・**『あの夕陽』**（新潮社）三月　「あの夕陽」「野の果て」「無人地帯」「対岸」「遠い陸橋」「私の原風景」
・第七二回芥川賞「受賞のことば」（「文芸春秋」）三月
・野の果て（「新潮」）四月
・肯定への戦い（「波」）四月　＊のち「形ないものの影」（『私のなかの他人』）に改題
・暗い参道（「海」）五月　＊のち「霧の参道」（『風の地平』）に改題
・グラビア　私の書斎（「中央公論」）五月
・ヤモリのいる部屋（「群像」）五月　＊のち改題「ヤモリの部屋」（『風の地平』）
・対談　異邦人感覚と文学・五木寛之と（「文学界」）四月＃
・故郷に行かざるの記（朝鮮）（「文学界」）六月　＊のち改題「失われぬもの」（『私のなかの他人』）
・サイゴンの老人（「別冊文芸春秋」）六月　夏季号＃
・グラビア　私の愛蔵　虫がつかれては困るもの（「週刊小説」）六月二七日
・**『エッセイ集　私のなかの他人』**（文芸春秋社）七月　「枠のない自画像（遠い憂愁・校旗を焼いた日・ヤモリ的な・地下鉄の隅で・四十九年秋・父と子・失われぬもの）」「闇のなかの呟き（半人間の悲しみ・創るべき日常・ドーナツの啓示・私のなかの他人・形ないものの影）」「出会い（母なるもの―五木寛之のエッセイ・現実という彼岸―安岡章太郎『舌出し天使』・世界を支援せよ―吉行淳之介『花束』・優しさについて―古山高麗雄『蟻の自由』・日常の光―島尾敏雄「引越し」・

韓国文学遠望」「めまいの年の記録（溶けろ、ソウル・光あれ・私はベトナムを見たか）」「他人のなかの私―あとがきにかえて」
・対談　戦後三十年の歩み「表現のたのしみ」（「文芸」）七月
・対談時評（「文学界」）八月・九月
・背番号は69（「文芸春秋」）九月
・韓国へ里帰りの妻とともに（「婦人公論」）一〇月
・**『孤独の密度』**（冬樹社）一一月　「天籟について」「焼跡から」「即物的ということ」「トーマス・マン『ファウスト博士』論」「三島由紀夫論」「大岡昇平『野火』論」「事実と虚構」「物と空虚」「梅崎春生『幻化』論」「谷崎潤一郎『夢の浮橋』論」「夢と文学」「井上光晴『海へ行く駅』論」「埴谷雄高『闇のなかの黒い馬』論」「ドストエフスキー『地下生活者の手記」論』「島尾敏雄「引越し」論」「あとがき」
・カッコのこと（「潮」）？

＊一九七六年（昭和五一）
・彼岸の墓（「中央公論」）一月
・空中庭園（「海」）一月
・日記（「風景」）二月
・**『風の地平』**（中央公論社）四月　「ヤモリの部屋」「空中庭園」「天堂への馬車代」「霧の参道」「彼岸の墓」「風の地平」
・対談時評―開かれる小説空間（「文学界」）四月＃
・オーストラリアの女たち（「婦人公論」）七月
・特集　小説の文章詩の言葉・エッセイ（「早稲田文学」）八月
・対談　ベレンコ中尉は広所恐怖症かな？（「週刊読売」）九月二五日
・私の宇宙誌（「週刊読書人」）一一月一五日～一九七八年四月二四日
・赤い月（「文芸展望」）一月冬号
・文明の中の野蛮（『岩波講座　文学　11』）一一月　＊のち「人間、この全体的なもの」（『聖なる彼方へ』）に改題
・虚無からの創造（「週刊読書人」）？
・孤独な大陸（「読売新聞」）？

＊一九七七年（昭和五二）
・一週間にこれだけ食べました（「週刊読売」）四月二日
・「月は東に」―黒い土と白い骨（「国文学」）八月　＊のち「魂の黒い風土」（『聖なる彼方へ』）に改題
・西湖幻々（「海」）八月
・漂泊（「文芸」）一〇月
・ポンペイの光（「海」）一一月
・闇ありき（「文芸展望」）一月冬号　＊のち「細胞一個」（『蛇のいた場所』）に改題
・此岸と彼岸の対境（『集英社世界文学』第20巻「月報」）？
・心の森（「読売新聞」）？

＊一九七八年（昭和五三）

・空室（「文学界」）一月
・蛇のいた場所（「文芸展望」）一月冬号
・北の火（「新潮」）二月
・裏階段（「文学界」）二月
・台地（「文学界」）三月　＊のち「廃園」（『鉄の時代』）に改題
・「文体」断想（「季刊文体」）三月春季号　＊のち「文体について」（『聖なる彼方へ』）に改題
・暗い穴（「文学界」）四月　＊のち『鉄の時代』に収録
・果ての谷（「すばる」）四月
・断層（「文学界」）五月
・**『漂泊・北の火』**（河出書房新社）五月　「漂泊」（改稿）「ポンペイの光」「北の火」（改稿）「西湖幻々」「サイゴンの老人」「あとがき」
・読書鼎談（「文芸」）四月・五月・六月
・共生（「文芸」）七月
・鉄の時代（「文学界」）七月
・言霊と地霊（「すばる」）八月
・河口（「文学界」）八月
・**『私という宇宙　迷路の王国』**（集英社）八月　「前口上」「序章」「肉体（体感・第三の眼・鳥人の夢・痔）」「衣食（深夜の牛罐・煙草・ネクタイ・レインコート）」「部屋（ゴム動力機・七輪・ゴムの木・窓・鏡）」「家（洋館・土塀・祖父の家・火・天と地の間）」「機械（テレタイプ・戦車・妄想機械・交換レンズ・艦橋・ロボット）」「生きもの（水族館・越境者・夜走るもの・交尾・ニワトリのいる風景・ヤモリ・影・龍）」「街（天壇・魂の地形・地下都市・地の果て・橋からの眺め・迷路電車・踏切・階段）」「山河（魔の河・黒い水・山・地平の木・雨ぞ降る・どこに還る・雪国）」「宇宙（赤い月・ブラック・ホール・渦巻くもの・大真空・時の曼荼羅・あるがままの夢幻）」「終章」　＊連載分から4編を削除し、「体感」「深夜の牛罐」「交換レンズ」「影」「終章」を書き下ろす。
・中間領域（「すばる」）九月
・心の地理（「新潮」）九月
・骨肉（「群像」）九月
・雲の柱（「文学界」）九月
・即物と抽象（「すばる」）一〇月
・井戸（「文学界」）一〇月
・逆光（「文学界」）一一月
・一冊への道（「すばる」）一一月
・往還（「文学界」）一二月
・短かさの中の豊かさ（「カイエ」）？
・神々の盆地（「読売新聞」）？

＊一九七九年（昭和五四）

・軌道（「季刊芸術」）一月冬号
・窓の女（「すばる」）一月　臨時増刊号　＊のち「窓の女神」（『蛇のいた場所』）に改題

・**『鉄の時代』**（文芸春秋社）三月　＊全体的に加筆改稿あり
「黒い穴」「裏階段」「空室」「廃園」「鉄の時代」「河口」「雲の柱」「井戸」「軌道」「断層」「共生」「骨肉」「逆光」
・座談　親と子の同時進行座談会（「週刊読売」）三月一一日
・黒い音（「群像」）四月　＊のち『黄道の光』「その一」に
・アンケート　私の卒業論文（「流動」）六月臨時増刊号
・座談　カンボジア大虐殺はなぜ起きたか（「週刊読売」）七月一日
・枯野の子（「群像」）七月　＊のち『黄道の光』「その二」に
・怒れる夢の人―回想・荒正人（「新潮」）八月
・正常人荒正人（荒正人追悼）（「文芸」）八月
・立体交差（「群像」）八月　＊のち『黄道の光』「その三」に
・母のない夜（「群像」）九月　＊のち『黄道の光』「その四」に
・対談時評　想像力と現実（「文学界」）九月
・根のイメージ（「自然と盆栽」）一〇月　＊のち「生命のイメージ」（『聖なる彼方へ』）に改題
・鉄と森（「文学界」）一〇月　＊のち「鉄と森、あるいは魂の二重性」（『聖なる彼方へ』）に改題
・影の部分（「群像」）一〇月　＊のち『黄道の光』「その五」に
・地下にもぐった現代彫刻―井上武吉の「迷宮」（「芸術新潮」）？
＊のち「奥深い場所」（『聖なる彼方へ』）に改題
・グラビア　私の結婚（「週刊文春」）一一月二九日
・谷間（群像）一一月　＊のち『黄道の光』「その六」に
・光る影（「群像」）一二月　＊のち『黄道の光』「完」に
・存在の根源に及ぶ想像力（「週刊読書人」）？
・三つの聖地（「読売新聞」）？
・運命の働きと書物（「すばる」）？

＊一九八〇年（昭和五五）

・大いなる感触―「放屁抄」安岡章太郎（「新潮」）一月　＊のち「遠く暗い声」（『聖なる彼方へ』）に改題
・創作合評（「群像」）一月・二月・三月
・文学・芸術・歴史そして俳句（「杉」）一月　＊のち「造化の世界」（『聖なる彼方へ』）に改題
・巫女のいる小宇宙―「女人祭」田久保英夫（「群像」）二月
・**『風の地平』**（中公文庫）二月　＊内容は単行本『風の地平』と同じ。川崎洋「解説」を付す。
・**『母のない夜』**（講談社）三月　「黒い音」「荒野の子」「血」「遠い声」「母のない夜」「地下」「谷間にて」「光る影」　＊『黄道の光』の総題で連載されたもの。ただし、章立てと章題は一部改変。
・光の感覚（「文学界」）四月　＊のち「光への郷愁」（『聖なる彼方へ』）に改題
・父の書き方（「文芸春秋」）五月
・雪女（「新潮」）五月
・対談時評（「文学界」）六月

・黒い水（「すばる」）六月
・『蛇のいた場所』（集英社）七月　「赤い月」「細胞一個」「蛇のいた場所」「黒い水」「雪女」「窓の女神」「果ての谷」
・ミミズの絡み合い（「婦人公論」）七月
・地下都市（「海」）八月
・読書鼎談（「文芸」）八月・九月・一〇月
・夜明け前の対話（「文芸」）八月
・不毛からの創造（「近代文学」）一二月
・「ウルリーク」は三度読み直し給え（「週刊読書人」）？

＊一九八一年（昭和五六）

・白い闇（「文学界」）一月
・抱擁（「すばる」）・一月「秘園」・三月「飛天女」・五月「向う側」・七月「白夜」・九月「方舟」
・本源の力　「初めの愛」坂上弘（「群像」）二月　＊のち「エロスと日常性」（『聖なる彼方へ』）に改題
・昼と夜の境に立つ樹（「海」）二月
・地下の家族（「新潮」）四月
・創作合評（「群像」）四月・五月・六月
・島（「作品」）四月　＊のち「月の島」（『天窓のあるガレージ』）に改題
・ドストエフスキイ（共同討議）（「文学界」）四月
・現場という場の震え「深んど」上田三四二（「群像」）八月
・ワルキューレの光（「文学界」）八月
・特別企画　離婚　離婚してふと思う“幸福”“不幸”尾を引く後ろめたさ（「週刊読売」）九月二七日
・俳句門前の記（「銀座百点」）九月　＊のち「聖三角形」（『聖なる彼方へ』）に改題
・渦巻（「海」）一〇月
・鷹の目（森敦『月山』記念碑建立記念文集）一一月　＊のち「自然で自由な空間の展開」（『聖なる彼方へ』）に改題
・読書鼎談（「文芸」）一一月・一二月
・夕焼けの黒い鳥（「新潮」）一二月
・『聖なる彼方へ　わが魂の遍歴』（ＰＨＰ研究所）一二月「まえがき」「約束の地―大地の神々、そして人間（三つの聖地・神々の盆地・心の森・黄昏の天国・孤独な大陸）」「ドリーム・タイム―生きる力と創造の根（人間、この全体的なもの・地の底への回帰・開かれた感覚・書くということ）」「書物という宇宙―われわれを夢みている夢（一冊の書物・閉じた無限・内なる彼方・永遠に女性なるもの・大いなる感触）」「造化の世界俳人・森澄雄との対話」
・父が守ったもの（「Voice」）一二月
・座談会・想像力はどこから・戸田盛和・三宅榛名と（「婦人之友」）一二月＃
・黄昏の天国（「読売新聞」）？

＊一九八二年（昭和五七）

・読書鼎談（「文芸」）一月

・29歳のよろい戸（「文学界」）一月新年号　＊のち（『天窓のあるガレージ』）
・天窓のあるガレージ（「海燕」）一月新年号
・聖家族（「文芸」）一月～九月
・**『抱擁』**（集英社）二月　「洋館」「少女」「白夜」「洪水」
・安岡章太郎『流離譚』　日本における“私”（「群像」）三月
・**『此岸の家』**（河出文庫）四月　＊収録作品は単行本『此岸の家』と同じ・「著者ノート」を付す
・「著者ノート」大いなる闇の流れ（『此岸の家』河出文庫）四月
・「私の世界」東山魁夷との対談（「読売新聞」）四月一日～三〇日夕刊
・愉しくもうら哀しきフルムーン旅行（「Voice」）四月＃
・解説（開高健『歩く影たち』新潮文庫）五月　＊のち「宇宙的な目」（『名づけられぬものの岸辺にて』）に改題
・**『天窓のあるガレージ』**（福武書店）五月　「ワルキューレの光」「昼と夜の境に立つ樹（改稿）」「月の島（改稿）」「天窓のあるガレージ」「29歳のよろい戸（改稿）」「夕焼けの黒い鳥」「地下都市」「渦巻」「あとがき」
・私の世界　今西錦司との対談（「読売新聞」）六月七日～七月九日夕刊
・**『科学の最前線　21世紀に人間と科学はどう変るか』**（学生社）六月　「はじめに（日野啓三）」「宇宙は爆発する―人類の未来は？（小尾信彌東大教授）」「生命の神秘―地球上の全生物の遺伝子メカニズムは共通だ！（渡辺格慶大教授）」「進化する海―陸地と海水は双生児（星野通平東海大教授）」「光、この無限なる空間の魔術師―人類の未来を光エネルギーで（戸田盛和横浜国大教授）」「脈動する地球―まだ30歳前の若さ（竹内均東大名誉教授）」「物質の根源―変幻自在の素粒子たちの美しい“極美の宇宙”（中村誠太郎東海大教授）」「気象のメカニズム―大気も生命の一部だ（駒林誠理学博士）」「コンピューターは頭脳を越えられるか―人間の能力を改めて自覚する刺戟（品川嘉也京大助教授）」「あとがき」　＊「読売新聞」掲載（三菱商事株式会社）
・書評インタビュー「我々の灰は新しい種族をつくりうるか」（「週刊ポスト」）六月二五日
・創作合評（「群像」）七月・八月・九月
・カラスの見える場所（「新潮」）八月
・東山魁夷との対談　開かれた孤独（対談を終えて）（「季刊みずゑ」）九月秋号
・俯く像（「文学界」）九月＃
・羽化（「すばる」）一〇月＃
・今西錦司との対談　創造性とは何か（「Voice」）一〇月
・ふしぎな球（「海」臨時増刊「子どもの宇宙」）一二月
・火口湖（「文学界」）一二月

＊一九八三年（昭和五八）

・草（「文芸」）一月

・江上波夫との対談　私の世界（「読売新聞」）一月四日～二月一六日夕刊
・冬の光のなかで（「群像」）二月
・ある未来（「新潮」）三月　＊のち「明日との対話」（『名づけられぬものの岸辺にて』）に改題
・『聖家族』（河出書房新社）三月
・対談　宇宙体験が開いた世界・立花隆と（「中央公論」）四月
・特集　いま、ラテンアメリカの文学・反対の一致（「すばる」）五月
・つねに最後の春（「文学界」）六月　＊のち改題「消えてゆく風景」（『階段のある空』）
・ラテンアメリカ文学特集・大地母神と戦う錬金術師（「ユリイカ」）七月
・「日野啓三対談集『創造する心』」（読売新聞社）八月　「東山魁夷　生かされて」「東山魁夷　開かれた孤独」「今西錦司　成るがままの世界」「今西錦司　創造性とは何か」「江上波夫　地平を超える構想力」「大いなる影　あとがきにかえて」
・空の階段（「文学界」）九月　＊のち改題「階段のある空」（『階段のある空』）
・向う側（「中央公論」）八月
・鉄道時計―大きな運命を見つめて（「週刊朝日」）九月二日＃
・創作合評（「群像」）一〇月・一一月・一二月
・空想の映画館（「海燕」）一一月
・解説（『幻化』福武文芸選書）？　＊のち「彼方からの声」（『名づけられぬものの岸辺にて』）に改題、さらに「無にさらされて」（『都市という新しい自然』）に再改題
・大地なき時代の神話？

＊一九八四年（昭和五九）

・夢を走る（「文学界」）一月新年号
・砂の街（「海」）一月新年号
・『名づけられぬものの岸辺にて　日野啓三主要全評論』（出帆新社）一月　「夜明け前の対話」「廃墟論」「悪夢の彼方」「空虚について」「夢みる力」「不毛からの創造（トーマス・マン『ファウスト博士』）」「存在のニヒリズム（三島由紀夫）」「彼方からの声（梅崎春生『幻化』）」「永劫に自発するもの（埴谷雄高『闇のなかの黒い馬』）」「謎の沼のなかで（ブルーノ・シュルツの幻想短編）」「物語るという戦い（ギュンター・グラス、ロブグリエ、ピオヴェーネ）」「魂のフロンティア（ニェメッツ『夜のダイヤモンド』デニス・ホッパー『イージー・ライダー』）」「宇宙的な目（開高健『歩く影たち』）」「われわれの時代の信和（T・G・バラード「書き下ろし」）」「空想の映画館（キューブリック『２００１年宇宙の旅』、タルコフスキー『ストーカー』）」「冬の光のなかで」「明日との対話」「あとがき」
・『あの夕陽』（集英社文庫）二月　「あの夕陽」「赤い月」「蛇のいた場所」「黒い水」「雪女」「果ての谷」「解説（奥野健男）」
・対談時評（「文学界」）二月・三月

・いま人類の意識の変容が始まっている（「中央公論」）五月
・my Books（「中央公論」）五月＃
・座談会　コスモロジー再構築への旅立ち・村上陽一郎・品川嘉也と（中央公論）六月
・星の流れが聞こえる家（「海燕」）七月
・孤独なネコは黒い雪の夢をみる（「新潮」）九月
・石の花（「中央公論文芸特集」）一〇月
・感性アップの時代（「読売新聞」）一〇月二三日
・**『夢を走る』**（中央公論社）一一月「カラスの見える場所」「星の流れが聞こえるとき（改稿）」「ふしぎな球」「砂の街（改稿）」「孤独なネコは黒い雪の夢をみる」「石の花」「夢を走る（改稿）」
・ビルの消えた日（「文学界」）一一月＃
・意識が現実をつくる（『ディック短編集3』サンリオＳＦ文庫）？

＊一九八五年（昭和六〇）

・砂丘が動くように（「中央公論」）一月～一二月
・大いなる影（「文学界」）三月　＊のち「ふしぎな影」（『階段のある空』）に改題
・新しい視覚（「新潮」）五月
・赤と黒―あるいは冥府からの贈り物（『現代世界の美術８ムンク』集英社）六月
・夢の島（「群像」）七月
・あゝ、親業、息子の将来をどうする（「Will」）八月
・私にとって都市も自然だ（「Newton」）九月
・鏡の高原（「海燕」）一〇月　＊のち「鏡面界」（『階段のある空』）に改題
・**『夢の島』**（講談社）一〇月　「夢の島」「あとがき」
・創作合評（「群像」）一〇月・一一月・一二月
・光る輪（「文学界」）一一月

＊一九八六年（昭和六一）

・風を讃えよ（「文学界」）一月
・なぜ、いま15分間スピーチか（「中央公論」）一月
・Living Zero（「すばる」）一月～一二月
・闇の誘い（「東京人」）二号　三月　＊のち改題「腐蝕する街」（『階段のある空』）
・東京が見えなくなる（「読売新聞」）三月二〇日夕刊
・七千万年の夜警（「海燕」）四月
・尖鋭化する夢の空間（「太陽」）四月
・**『砂丘が動くように』**（中央公論）四月　＊加筆訂正あり
・特集　Ｊ・Ｇ・バラード―終末の感覚　徹底討議　テクノロジーの誘惑―結晶の美学、絶滅の倫理（「ユリイカ」）六月
・都市は廃墟をはらんでいる（「毎日新聞」）八月九日夕刊
・**辻井喬・日野啓三『昭和の終焉　20世紀諸概念の崩壊と未来』**（トレヴィル）九月「Part　1・2・3」「あとがき」「著作リスト」

・実存的冷気（「ユリイカ」）一〇月
・坂口安吾特集　恩寵の神話（「ユリイカ」）一〇月
・インタビュー　不安の時代に（「文学界」）一一月
・茫々と充実している（「中央公論」）一一月＃
・創造的なほど錯乱的な（「信濃毎日新聞」）八月？

＊一九八七年（昭和六二）

・窓を想像せよ（「文学界」）一月
・一九八七年蝕覚的考察（「群像」）新年号～一二月　＊のち『都市の感触』に改題
・アンケート　クラシック音楽の聴き方　私流音楽鑑賞術（「サントリー・クォータリー」）一月
・内なる洋館（「青春と読書」）一月
・ランナーズ・ハイ（「新潮」）一月
・インタビュー　日野啓三氏に聞く―“夢の島”に棲むひとびと（「サントリー・クォータリー」）三月
・タルコフスキーの“世界感覚”（「マリクレール」）三月
・自然の筋目を縫って―地球一周ボイジャー機の新しさ（「中央公論」）三月
・第九七回芥川龍之介文学賞「選評」（「文芸春秋」）三月　＊これ以降一二六回まで「選評」
・インタビュー　２０“世紀末”は[元気]か[病気]か　“夢の島”に棲むひとびと[略歴]（「サントリー・クォータリー」）四月
・**『夢を走る』**（中公文庫）四月　＊加筆訂正あり　「カラスの見える場所」「星の流れが聞こえるとき」「ふしぎな球」「砂の街」「石の花」「孤独なネコは黒い雪の夢を見る」「夢を走る」「解説（池澤夏樹）」
・はな子さんの文学探検―インタビュー・如月小春（「すばる」）四月＃
・『Living Zero』（集英社）四月　「空白のある白い町」「放散虫は深夜のレールの上を漂う」「何かが都市にやってくる」「母なる大地？」「ホワイトアウト」「世界という音―ブライアン・イーノ」「空を生きる」「イメージたちのワルプルギスの夜」「みずから動くもの（自然＝機械＝人間）」「私は私ではない」「球形の悲しみ」「夢の奥に向かって目覚めよ」「あとがき」
・日野啓三特別インタビュー『廃墟』を旅する単独者（「文学界」）四月
・春・宵・清・談　高血圧の読書術と低血圧の読書術（「Asahi Journal」）四月二〇日臨時増刊号
・見えないものを見る―「自分史」と小説（「世界」）五月＃
・幻想を生きる場所（「読売新聞」）五月二〇日・あとがき（作品社『日本の名随筆55　葬』）五月
・新しい空間（「マリクレール」）六月
・**『天窓のあるガレージ』**（福武文庫）七月＊単行本の内容に、「文庫版あとがき」と「解説」（菊田均）を加える。のち「あとがき」は「“私”が消えた」に改題（『都市という新しい自然』）

・不思議の国の駅　垂直の旅（「太陽」）七月
・ONCE UPON A TIME IN TOKYO（「別冊文芸春秋」）七月
・対談　文学が成り立つ場所（「文学界」）八月
・**『階段のある空』**（文芸春秋社）八月　「火口湖」「階段のある空」「消えてゆく風景」「ふしぎな影」「鏡面界」「風を讃えよ」「七千万年の夜警」「腐蝕する街」「あとがき」
・対談　科学と文学（「新刊展望」）一〇月
・光る荒地（「新潮」）一〇月
・人はなぜ水辺に惹かれるか・樋口忠彦・川田順造と（「東京人」）一〇月＃
・対談　焼跡闇市時代は「現代」の教科書である（「プレジデント」）一二月
・自己増殖する鉱物都市（「ＮＷ」）二号
・ＡＩ（人工知能）の不気味な魅力（「ＡＩジャーナル」）一〇号
・地下鉄のしみ（「群像」）？

＊一九八八年（昭和六三）

・岸辺にて（「海燕」）一月新年号
・創作合評（「群像」）一月・二月・三月
・“向う側”ということ（成瀬書房『向う側』）二月　＊特装限定版
・講演　今、何故文学か（「早稲田文学」）二月
・積極的短篇小説（「文学界」）二月
・エイズの奥にあるもの（「新潮」）二月　＊のち「エイズを呼び出したもの」（『都市という新しい自然』）に改題
・**『きょうも夢みる者たちは』**（新潮社）二月　「ランナーズ・ハイ」「光る荒地」
・**『都市の感触』**（講談社）二月　＊「一九八七年　触覚的考察」（「群像」）を改題　「地下のしみ」「白と黒」「閉じこめられて」「亀裂よ走れ」「見えない時代」「日常という夢」「ヴューアーズ・ハイ」「においのない風景」「ニュートラルな音」「めぐるもの」「新しい連関」「イルカは跳んだ」「あとがき」
・「都会」から「都市」へ（「本」）三月
・時間（とき）がなだれる（「海燕」）三月＃
・「豊かさ」という夢（「新潮」）四月＃
・「機動戦士ガンダム・逆襲のシャア」をめぐって・富野由悠季・佐々木淳子と（「Asahi Jounall」）四月一五日＃
・ささやかな闇の発見（「群像」）四月
・**『夢の島』**（講談社文庫）五月　＊単行本の内容に「著者から読者へ（『夢の島』へ）」「解説（三浦雅士）」「作家案内（日高昭二）」「著書目録」を付す。「著者から読者へ」は「埋立地の物語」と改題（『都市という自然』）
・廃墟の宇宙論（コスモロジー）（「新潮」）五月
・虚無よりに虚構（「群像」）五月
・砂漠　究極の風景（「旅」）八月
・**『都市という新しい自然』**（読売新聞社）八月　「廃墟のコスモロジー」「私にとって都市も自然だ」「都市は廃墟をはらん

でいる」「「都会」から「都市」へ」「自己増殖する鉱物都市」「尖鋭化する夢の空間」「幻想を生きる場所」「東京が見えなくなる」「感性アップの時代」「新しい視覚」「創造的なほど錯乱的な」「エイズを呼び出したもの」「ＡＩ（人工知能）の不気味な魅力」「自然の筋目を縫って―ボイジャー機の世界一周録」「いま人類の意識の変容が始まっている」「大地なき時代の神話―Ｊ・Ｇ・バラード（改題「われわれの時代の神話」『名付けられぬものの岸辺にて』）」「意識が現実をつくる―フィリップ・Ｋ・ディック」「新しい空間―ウィリアム・ギブスン『ニューロマンサー』」「タルコフスキーの“世界感覚”」「冥府からの贈り物―ムンク」「虚無よりの虚構―中島敦「文字禍」など」「実存的冷気―坂口安吾」「無にさらされて―梅崎春生『幻化』」「“向う側”ということ（処女作「向う側」）」「大いなる闇の流れ（短編連作『此岸の家』）」「内なる洋館（長編『抱擁』）」「“私”が消えた（短編集『天窓のあるガレージ』）」「埋立地の物語（長編『夢の島』）」「砂漠―究極の風景」「あとがき」「初出一覧」「日野啓三主要著作」

・背後には何もないか（「海燕」）一〇月

・ここはアビシニア（「群像」）一一月

＊一九八九年（昭和六四・平成元）

・林でない林（「海燕」）一月新年号

・あゝ霊魂（「文学界」）三月＃

・Metamorphoses（「エスクァイア　日本版」）四月～一九九〇年三月

・「由熙」―李良枝―ある飛躍（「新潮」）五月

・天使のささやき（「海燕」）五月＃

・対談　宇宙をめぐる主題・池澤夏樹と（「すばる」）八月

・対談　極北インディアンの精神世界（「文学界」）九月　＊文化人類学者・原ひろ子と

・柄谷行人―闘争する批評・不可解に立つ（「国文学」）一〇月

・森が生きるように（「群像」）一〇月＃

＊一九九〇年（平成二）

・対談　開高文学の“輝ける闇”向井敏と（「文学界」）二月

・対談　創作における虚実（「文芸」）三月

・黒い天使（「海燕」）四月

・対談　転位する現実―ホンモノ／ニセモノを越えて・武田徹と（「早稲田文学」）五月＃

・『MONOLITH』（トレヴィル）六月　＊写真　稲越功一　「地の果てで」「黒衣の男たちの谷」「ごみを捨てにゆくとき」「森の黙示録」「細胞たちの森」「青い沼」「聖なる形」「都市が自然を呼び寄せる　1」「都市が自然を呼び寄せる　2」「ヒヒ関係」「冬の光」「月を見上げて」「あとがき」

・メランコリックなオブジェ（「中央公論文芸特集」）六月夏季号

・対談　９０年代、知の創造力をめぐって・辻仁成と（「すばる」）八月

・『どこでもないどこか』（福武書店）九月　「序詞」「背後には何もないか（改稿）」「ここはアビシニア」「林でない林（改稿）」「メランコリックなオブジェ（改稿）」「黒い天使」「岸辺にて」「あとがき」
・文明季評９０冬―東京タワーが救いだった―腎臓ガン手術からの生還（「中央公論文芸特集」）一二月

＊一九九一年（平成三）

・牧師館（「文学界」）一月
・屋上の影たち（「文芸春秋」）四月
・断崖の白い掌の群（「中央公論文芸特集」）六月夏季号
・対談　二元論からの脱却を―国家・民族・文化　青木保と（「世界」）七月
・台風の眼（「新潮」）七月～一九九三年三月
・インタビュー　回生する文学、その可能性・新井満（「すばる」）九月
・新芥川賞作家特集・新聞言語と小説言語の狭間で・辺見庸と（「文学界」）九月＃
・雲海の裂け目（「中央公論文芸特集」）九月秋季号

＊一九九二年（平成四）

・連続対談　死について（柄谷行人）（「すばる」）一月
・世界の同意（「文学界」）二月　＊のち「カラスのいる神殿」（『遥かなるものの呼ぶ声』）に改題
・『断崖の年』（中央公論社）二月　「東京タワーが救いだった」「牧師館」「屋上の影たち」「断崖の白い掌の群」「雲海の裂け目」
・言葉・死・狂気―人間存在への根源的問いを発する知的興奮に満ちた対話・丸山圭三郎と（「文学界」）四月＃
・われらの世界（「中央公論文芸特集」）六月＃

＊一九九三年（平成五）

・流砂の遠近法（「読売新聞」）一九九三年～一九九五年・毎月連載
・追悼　安部公房―永遠の相の下に（「文学界」）四月＃
・中島敦　存在の不確かさあるいは文学という恩寵（ちくま文庫『中島敦全集』3「解説」）五月
・『台風の眼』（新潮社）七月
・火星の青い花（「すばる」）七月
・顔のない私（「中央公論文芸特集」）六月夏季号　＊のち「石を運ぶ」（『聖岩　Holy Rock』）に改題
・変容する「私」〈特集〉・「私」という現象（「群像」）八月＃
・対談　われら近代化の児・安岡章太郎（「新潮」）九月＃
・戦争文学（読書特集）いま戦争文学を読む「戦争と平和」から「輝ける闇」まで・加賀乙彦・川村湊と（「文学界」）九月＃
・トマス・ピンチョンとは何か（特集）「重力の虹」をめぐって・池澤夏樹・越川芳明と（「文学界」）一一月＃

＊一九九四年（平成六）

・なぜ書くのか（「群像」）一月＃

・がん手術で悟った「人生は幻なり」（核心インタビュー）（「現代」）一月＃

・オアシスの園で（「中央公論文芸特集」）九月秋季号　＊のち改題「大塩湖から来た女性」（『梯の立つ都市　冥府と永遠の花』）

・存在の夜（「すばる」）六月

・聖岩（「中央公論文芸特集」）九月秋季号　＊のち改題「大塩湖から来た女性」（『梯の立つ都市　冥府と永遠の花』）

・インターゾーン（「文学界」）一九九四年二月～一九九五年八月　＊のち『光』（文芸春秋・一九九五年一一月）に改題

・安岡章太郎『月は東に』　現実に曝されるということ（『月は東に』「解説」講談社文芸文庫）八月

・吉行淳之介追悼　虚無に光る細胞（「新潮」）一〇月

・キリコとムンク・ブルーノシュルツ・丸山圭三郎（「群像」「一頁人物論」）四月～六月

・言葉とは何か　？九月

＊一九九五年（平成七）

・遥かなるものの呼ぶ声（「中央公論」）一月

・幻影と記号（「すばる」）一月

・プロローグ　心の隅の小さな風景（「朝日新聞」出あいの風景）　＊（三月二〇日「ポプラ」・三月二二日「カラス」・三月二三日「花のオアシス」・三月二四日「踏切」）

・詩について考えることで触発された小説家の独想（「海燕」）三月

・詩とことばの周辺（「俳句研究」）三月＃

・創作合評（「群像」）四月・五月・六月

・塩塊（「すばる」）六月

・古都（「中央公論文芸特集」）六月夏季号

・再掲載作品・風を讃えよ（「文芸春秋」）七月＃

・文学的独想（「海燕」）八月

・**『光』**（文芸春秋社）一一月　「第一部　帰ってきた男」「第二部　魂の地下」「エピローグ」

・**『聖岩　Holy Rock』**（中央公論社）一一月　「プロローグ　心の隅の小さな風景」「塩塊」「聖岩」「幻影と記号」「古都」「遥かなるものの呼ぶ声」「カラスのいる神殿」「石を運ぶ」「火星の青い花」「あとがき」

・特集　大岡昇平と戦争文学・シンポジュウム・作家はいかに誕生したか（「文学界」）一一月＃

＊一九九六年（平成八）

・黒よりも黒く（「文学界」）一月

・先住者たち（「新潮」）一月　＊のち「先住者たちへの敬意」（『梯の立つ都市　冥府と永遠の花』）に改題

・荒川（「フロント」）一月

・ドストエフスキーの謎の一節（「すばる」）一月

・**『流砂の声』**（読売新聞社）二月　「Ⅰ　流砂の遠近法」「Ⅱ　恐怖と知恵」「Ⅲ　対談　「極北インディアンの精神世界」・

原ひろ子と」「Ⅳ　文学的独想」「Ⅴ　敬愛する作品とひと」「あとがき」
・飛耳張目・野又穫『来たるべき場所』展（「文学界」）四月＃
・闇の白鳥（「すばる」）五月
・対談・生命のシステムと言葉・多田富雄と（「新潮」）六月＃
・ヘルシー・トーク・麻酔の不思議（「暮しと健康」）八月＃
・随想・雲の行方（「現代」）八月＃
・『生活という癒し』（ポーラ文化研究所 POLA seminars）九月
・随想・世紀の峠近く（「新潮」）九月＃
・司馬遼太郎の跫音（あしおと）（「中央公論」）九月＃
・梯の立つ街（「群像」）一〇月　＊のち改題「梯の立つ都市」（『梯の立つ都市　冥府と永遠の花』）
・対談特集・過去・現在・未来に「戦後の文学とイデオロギーの喪失・安岡章太郎と（「群像」）一〇月＃
・第一五回「海燕」新人文学賞「選評」（「海燕」）一一月＃
・特別対談・第二の敗戦―いま必要な「言葉」とは・藤原新也と（「文学界」）一一月＃
・立花隆を読む・「宇宙からの帰還」（「文芸春秋」）一一月＃
・『日野啓三短篇選集　上下』（読売新聞社）一二月　上巻「向う側」「此岸の家」「聖家族」「天窓のあるガレージ」「夢を走る」「孤独なネコは黒い雪の夢をみる」「七千万年の夜警」「鏡面界」「風を讃えよ」「初出一覧」　下巻「光る荒地」「林が林でなくなるとき」「黒い天使」「牧師館」「断崖にゆらめく白い掌の群」「火星の青い花」「古都」「初出一覧」「あとがき―覚え書き風に」「解説　彼岸へ渡る契機　池澤夏樹」「著作リスト」
・性交という恩寵―J・G・バラード新作『女たちのやさしさ』に即して（「文学界」）一二月＃

＊一九九七年（平成九）

・踏切（「すばる」）一月
・天池（「群像」）一九九七年一月～一九九九年三月　＊一九九八年二・三・四月号休載
・境界にて（「文学界」）一月
・シンポジュウム　新しい普遍へ（特集沖縄―文学の鉱脈）（「文学界」）四月
・対談　記憶する身体・飛翔する意識・三木卓と（「すばる」）五月
・連続討論「かくて『悪魔』は解放された」（日本の知性は「酒鬼薔薇聖斗」に何を見たか）西垣通・大澤真幸・吉岡忍他（「現代」）八月＃
・谷崎潤一郎賞「選評」（「中央公論」）一九九七年一一月～二〇〇一年一一月

＊一九九八年（平成一〇）

・ここで踊れ（「すばる」）一月　＊のち「ここは地の涯て、ここで踊れ」（『梯の立つ都市　冥府と永遠の花』）に改題
・十月の光（「新潮」）一月　＊のち改題「冥府と永遠の花」（『梯

の立つ都市　冥府と永遠の花』）
・書くことの秘儀―マルグリット・デュラス『愛人』（「すばる」）一月
・**『日野啓三自選エッセイ集　魂の光景』**（集英社）一二月　Ⅰ「焼け跡について」「溶けろ、ソウル」「悪夢の彼方―ベトナムの夜の底で」「空虚と物」　Ⅱ「〈私〉という宇宙誌（・心のなかの宇宙・赤い月・レインコート・ニワトリのいる風景・テレタイプ・石段・迷路電車・影・ブラックホール・開かれた盆地・夢の奥に目覚めるように）」「夢より深い夢―埴谷雄高『闇のなかの黒い馬』」　Ⅲ「冬の光のなかで」「地下鉄のしみ」「メタモルフォーゼ（・黒衣の男たちの谷・内なる青い沼・光への憧れ・月を見上げて）」「イルカは跳んだ―ある感触」　Ⅳ「断崖にゆらめく白い掌の群」「文学という恩寵―中島敦」「書くことの秘儀―マルグリット・デュラス『愛人』」「存在の夜」「光の光」「魂の光景（・ポプラ・廃墟・世界の中心・砂漠・石棺の女神・野の果ての小さな教会・ブラームス・踏切）」「あとがき」「主要著作リスト」「著者略歴」　＊「ポプラ」「踏切」は一九九五年「朝日新聞学芸欄」―他は一九九八年の書き下ろし
・ユーラシアの風景〜世界の記憶を辿る〜（「ユーラシアニュース」一九九八年三月〜二〇〇二年四月）
・至福の時　畏るべきfey（「季刊アステイオン」）一〇月＃

＊一九九九（平成一一）

・読書生活―光る繊維（「文学界」）一月
・新芥川賞作家特別対談　聖なるものを求めて（「文学界」）平野啓一郎と　三月
・小説をめぐるフーガ（「すばる」）三月〜一〇月　「はじめに・忘却の川」「前世の記憶」「初めに怖れがあった」「森の中で」「人間に成る」「呪術的儀式」「神話的思考」「歴史の裂け目」
・創作合評（「群像」）四・五・六月
・『天池』（講談社）五月　「Ⅰ　夜は山にのぼる」「Ⅱ　それぞれの湖」「Ⅲ　傷」「Ⅳ　ふたりはひとりではない」「Ⅴ　目を覚ませ」「Ⅵ　静寂の奥行」「Ⅶ　光る闇」「Epilogue」「あとがき」
・遠いところから帰ってきた男（「本」）六月＃
・随筆・わが聖地（「中央公論」）七月

＊二〇〇〇年（平成一二）

・カオスの縁で（「群像」）一月
・精霊の降りてくる道（1）（2）（「すばる」）一・二月
・私を小説家にしたこの一冊　梅崎春生『幻化』（「三田文学」）二月
・**境界を越える対話**（『日本トランスパーソナル学会講演集』日本トランスパーソナル学会）四月
・対談　ソウルの富士山―クモ膜下出血でふたたび“断崖”に立たされた作家の目に映った光景とは・保坂和志と（「中央公論」）九月＃

・ＨＯＴ　ＴＡＬＫ　幾度もの大病を乗り越えたからこそ大事にしたい“生きる”という感覚―作家・評論家　日野啓三（「ばんぶう」）九月＃
・（インタビュー思う存分）作家日野啓三さん―「入院一〇〇日介護保険の認定手続きしています」（「読売ウイークリー」）一一月一二日＃
・ふたつの千年紀（ミレニアム）の狭間で―「落葉」・「風が哭く」（「すばる」）一二月

＊二〇〇一年（平成一三）

・ふたつの千年紀（ミレニアム）の狭間で―「薄青く震える光の中で」（「すばる」）一月　＊のち改題「薄青く震える秋の光の中で」（『落葉　神の小さな庭で』）
・ふたつの千年紀の狭間で（「すばる」）―「日中手話親善大会」二月・「迷宮庭園」三月・「微笑」四月　＊のち「ある微笑」（『落葉　神の小さな庭で』）に改題　「デジャ・ヴュ」五月　＊のち「デジャ・ヴュ―背理の感触」（『落葉　神の小さな庭で』）に改題　「生成無限」六月　＊のち「生成無限―転生の賦」（『落葉　神の小さな庭で』）に改題　「黒い音符」八月・「帰郷」九月・「新たなマンハッタン風景を」一一月・「公園にて」一二月　＊のち「神の小さな庭で」（『落葉　神の小さな庭で』）に改題
・**『遥かなるものの呼ぶ声』**（中央公論新社）三月　＊単行本『聖岩』（一九九五年一一月・中央公論社）を改題、加筆し中公文庫に「示現　月光のエアーズ・ロック（「聖岩」を改題）」「聖記号　カッパドキア岩窟群（「幻影と記号」を改題）」「遥かなるものの呼ぶ声　タクラマカン砂漠（「遥かなるものの呼ぶ声」を改題）」「古都　美と暴力と（「古都」を改題）」「カラスのいる神殿　慶応義塾大学病院（「カラスのいる神殿」を改題）」「顔のない『私』　秋田大湯環状列石（「石を運ぶ」を改題）」「世界ということ―単行本あとがき」「世界は荒涼と美しい―文庫版あとがき」
・**『梯の立つ都市　冥府と永遠の花』**（集英社）五月　「黒よりも黒く」「先住者たちへの敬意」「闇の白鳥」「梯の立つ都市」「踏切」「冥府と永遠の花」「ここは地の涯て、ここで踊れ」「大塩湖から来た女性」「あとがき」
・対談　新たな物語の生成のために・池澤夏樹と（「すばる」）七月
・対談　中島敦の文学・勝又浩と（「ちくま」）一一月

＊二〇〇二年（平成一三）

・**『落葉　神の小さな庭で』**（集英社）五月　「落葉」「風が哭く」「薄青く震える秋の光の中で」「日中手話親善大会」「迷宮庭園」「ある微笑」「デジャ・ヴュ―背理の感触」「生成無限―転生の賦」「黒い音符」「帰郷」「帰郷（続）」「新たなマンハッタン風景を」「神の小さな庭で」「あとがき」
・**『ユーラシアの風景～世界の記憶を辿る～』**（ユーラシア旅行社）八月

＊二〇〇三年（平成一四）

・『書くことの秘儀』（集英社）一月　「はじめに」「忘却の川」「前世の記憶」「初めに怖れがあった」「森の中で」「人間に成る」「呪術的儀式」「神話的思考」「歴史の裂け目」「書くことの秘儀―マルグリット・デュラス『愛人』」

（鹿児島大学名誉教授）